

藝林史評④

「靖国問題」の貴重な資料と論集

靖国神社は、戦前も戦後も特別な性格と役割を担ってきた。それゆえ、いわゆる靖国問題は、少くとも戦後六十余年の歩みを正確に踏まえ、できれば幕末維新以来の流れをトータルに見渡しながら、冷静に論ずる必要がある。さらに言えば、古代以来の思想史や政治史などの延長線上で考えることが望ましい。この点、幸い最近、貴重な資料集や論文集が公開されているので、その一端を紹介しよう。

まず昨年三月、国立国会図書館の調査立法検査局編刊『新編 靖国神社問題資料集』が出た。A4判・合計二一八頁の大冊で、しかも全文インターネット上に公開されている。

構成は嘉永六年（一八五三）から平成十二年までを四期に分け、そこに(一)靖国神社所蔵「靖国神社合祀者資格審査綴」等、(二)厚労省所蔵「戦没者身分等調査に関する都道府県あて文書」、(三)米オレゴン大学所蔵「ウッドワード文書」、(四)国会図書館所蔵「閣僚の靖国神社参拝問題に関する懇談会報告書」等、(五)環境省所蔵「千島ヶ淵戦没者墓苑建設の経緯」等、まさに新発掘の膨大な「一級資料」が網羅されている。

このうち、(一)と(二)により、研究会代表の春山明哲氏（同館専門調査員）が「解題」（六頁）に記されるごとく、厚生省援護局の「合祀事務協力は昭和四五年まで継続され……六一年まで……事実上継続していたことが分る」つまり「国の機関と靖国神社の関係」が不離一体となり行ってきた「合祀事務の具体相を知る」ことができる。私は本資料集が出ることを知らずに、前年苦心して(一)などを調べ、拙稿「靖国祭神」の要件と合祀の来歴」を本誌第五卷第二号（昨年十月）に載せたが、それに一層確実な裏付けをえたことになり心強い。

また(三)は、GHQの宗教政策に直接関与したウィリアム・ウッドワード（一九七三年歿）旧蔵文書の抄録である。これを最初に見出して一昨年八月に放映したのは、NHKの中村直文氏を中心とする取材班であり、その成果が『靖国―知られざる占領下の攻防』（NHK出版、昨年六月刊）にほかならない。なお、本会々員の清水師氏（金沢工大講師）もオレゴン大学へ調査に赴き、同文書の研究を進めている。

さらに広義の靖国問題を本格的に研究した論文集が出た。ひとつは『明治聖徳記念学会紀要』（復刊四四号、昨年十一月）の特集「日本人の靈魂観と慰霊」である。伴五十嗣郎氏の巻頭言、安蘇谷正彦氏「神道の生死観と神道古典」以下二十二本の論考と主題のシンポジウム（新田均・武田秀章・中山郁・阪本是丸の四氏）記録などを収める（A5判・全五一〇頁）。靖国神社を中心に論じたものに限っても、小堀桂一郎氏「靖国信仰に見る日本人の靈魂観」、今井昭彦氏「近代日本と戦死者祭祀」、所功「靖国神社みたま祭の成立と発展」などがある。

もうひとつは國學院大學研究開発推進センター編「慰霊と顕彰の間」（錦正社、本年七月刊）である。阪本是丸氏（同センター長）刊行の辞、藤田大誠氏「日本における慰霊・追悼・顕彰研究の現状と課題」およびシンポジウムの記録として、報告①藤田大誠氏「国家神道と靖国神社に関する一考察」、報告②粟津賢太氏「戦地巡礼と記憶のアリーナ」、報告③西村明氏「慰霊再考―ジズメ」と「ブルー」の視点から―、大谷栄一氏のコメントと討議、ついで研究会の記録として、池上良正氏の旧稿「靖国信仰の個人性」に基づく報告、菅浩二・藤本願生両氏のコメントと質疑応答、さらに「近現代日本の慰霊・追悼・顕彰に関する主要研究文献目録」（作成藤田氏、中山郁氏「あとがき」から成る（全三三二頁）。

共に大変充実した内容で、従来の村上重良氏等による不正確な俗解を払拭し、まさに「建設的な学術交流がなされた」（阪本氏）ことは、大きな意味があると思われる。

（所 功）